

塩津港遺跡発掘調査現地説明会資料

平成 24 (2012) 年 7 月 14 日 (土) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

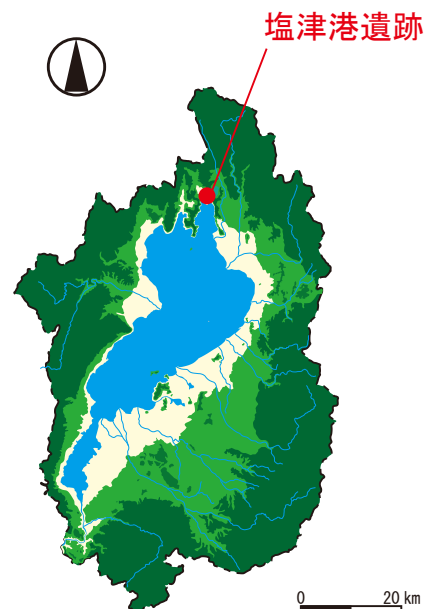


公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

調査の経緯

塩津港遺跡は、長浜市西浅井町塩津浜に所在する古代から近世まで 1000 年以上にわたって琵琶湖の水運の要衝であった塩津港に関わる遺跡です。平成 18 ~ 20 年度に実施した発掘調査では、平安時代後期の神社跡が検出され、5 体の神像や約 300 点の木簡（起請札など）が出土しています。

今回の発掘調査は、国道 8 号塩津バイパス建設工事に伴うもので、国土交通省滋賀国道事務所からの依頼により、滋賀県教育委員会が調査主体、公益財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり、平成 24 年 5 月から実施しています。



発掘調査区と琵琶湖（北西から） 平安時代の遺構は、地表面から約 2 m 掘り下げた深さで見つかりました。その深さは、現在の琵琶湖水面より約 30 cm 低い位置にあたります。

調査の概要

現地表面から約2m掘り下げた標高約84mで、琵琶湖岸を埋め立てた平安時代後期（12世紀中頃）の護岸施設を伴う遺構を確認しました。湖岸の埋め立て造成の厚さは、最大約1.5mを測ります。

埋め立てによって造られた区画の汀線は、礫敷きによって護岸されており、区画の南側と西側の2辺を検出しています。琵琶湖に面する南端は、杭で固定した横木と人頭大の石材を用いた礫敷きによって護岸され、西側は南側よりも厚く礫敷きが施されています。礫敷きに囲まれた区画の内側には、横木や数列の杭列が東西方向に平行して認められ、埋め立てた工程が観察されます。

礫を用いた護岸施設を伴う埋め立ては、平安時代後期に行われたと見られ、造成した区画内では井戸と埋甕2基を検出しました。井戸は、一辺約1mの縦板組みの構造で、部材が良好に残存しています。埋甕は、越前焼と見られる甕を地面に据え付けたもので、1基は甕の抜き取り痕のみを検出したものです。また、井戸や埋甕の周辺には扁平な石材や炭を含む地表面があり、何らかの建物等が存在していた可能性があります。

出土遺物では、埋め立て造成した区画からは、越前焼の甕、土師器皿、輸入磁器などの陶磁器類のほか、箸や漆器などの木製品が出土しています。また、造成土の基底部からは、12世紀第2四半期頃の土器や木製品が出土し、造成土層の中にも12世紀中頃の遺物が多く含まれていることから、埋め立て造成は12世紀中頃以降に行われたと考えられます。

□遺構の概要

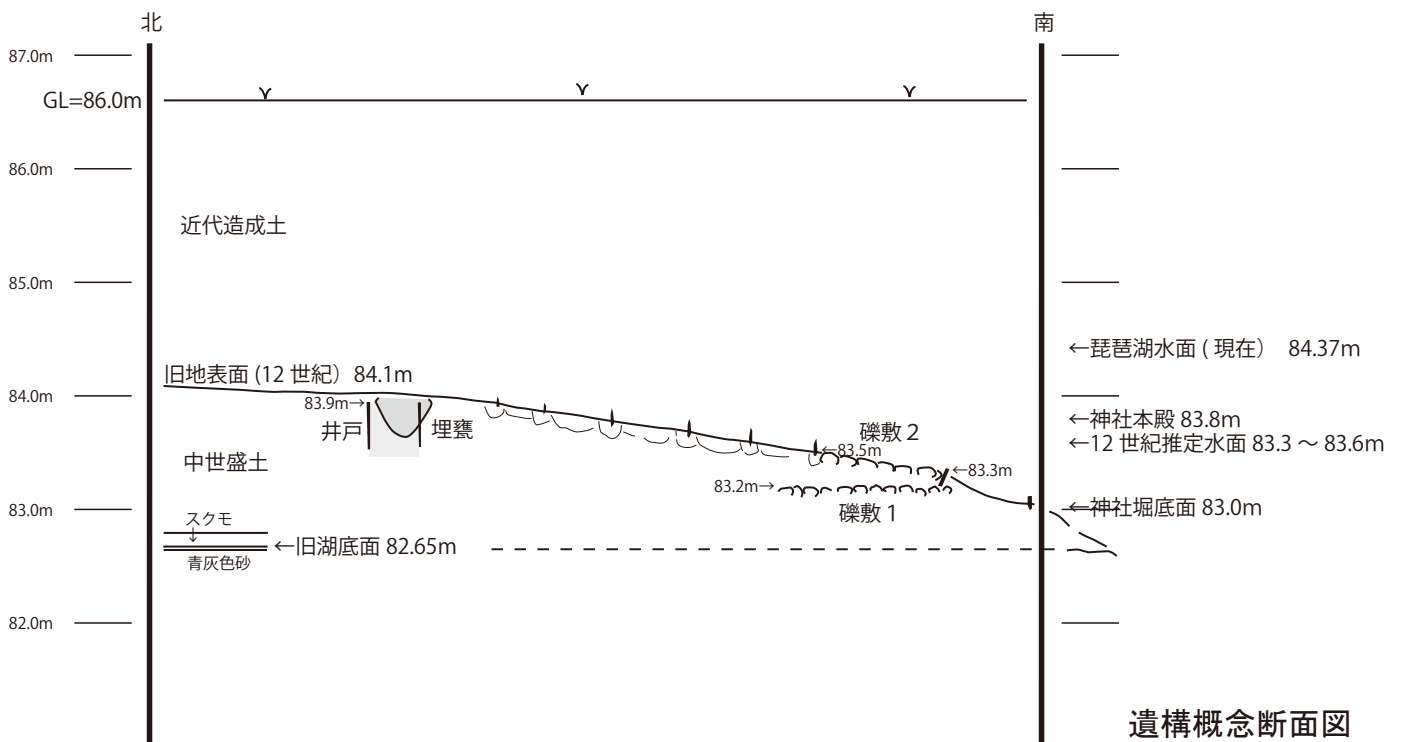
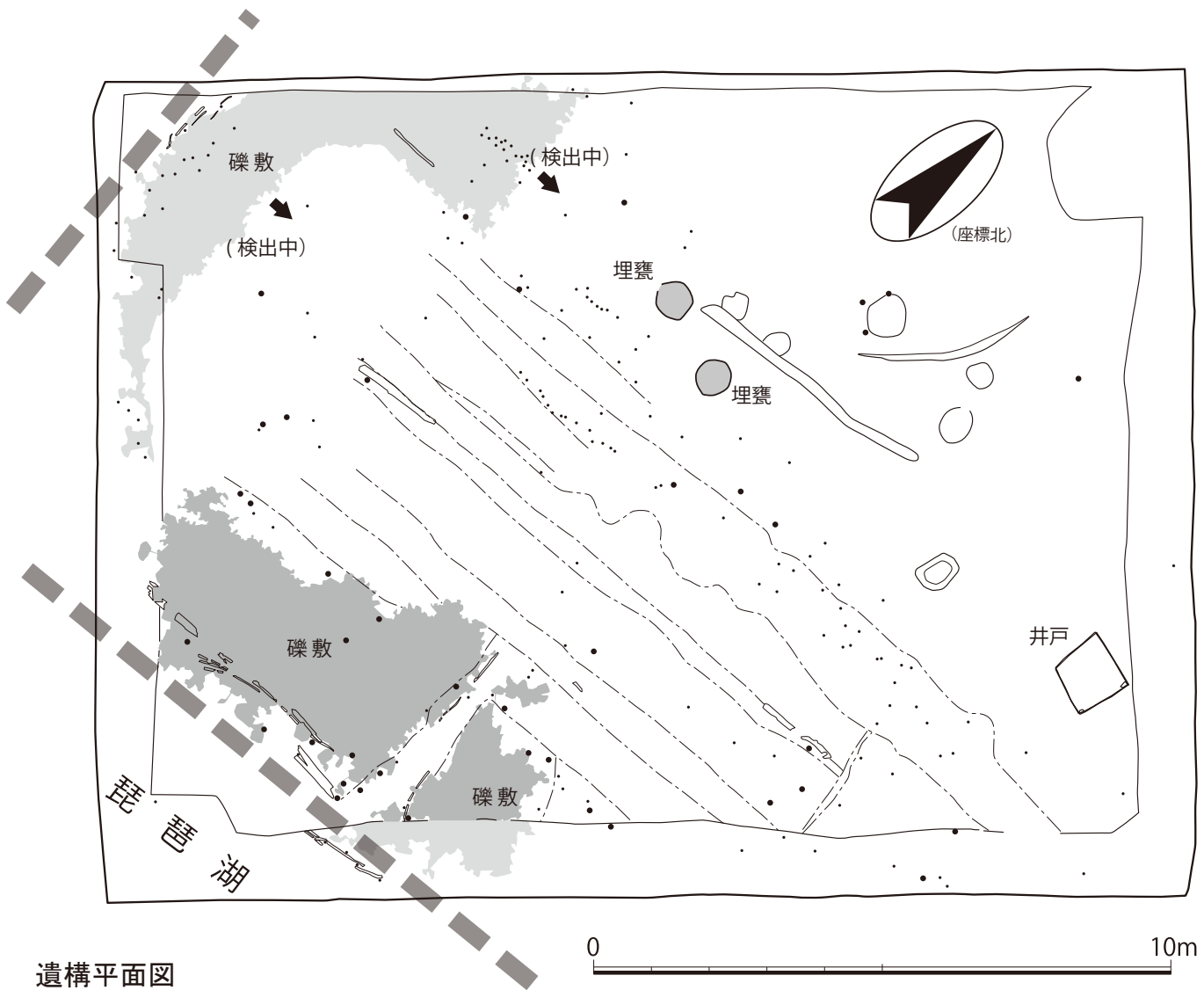
- ・ 礫敷き 人頭大程度の石材
区画の南辺 東西約8m・南北約2～3.5m
区画の西辺 東西約4m以上・南北約7m
- ・ 井戸 縦板組み構造 平面約1m四方
- ・ 埋甕 2基 ①越前焼 ②埋甕の抜き取り痕



塩津港遺跡位置図 (S=1/50,000)



調査区全景 (平安時代後期の遺構検出状況)



ま と め

塩津港は、琵琶湖の最北端にある港で、古代以来、北陸方面からの陸路と琵琶湖の水運が結節する港として重要な役割を果たしてきました。北陸からの物資は、敦賀からの峠道である塩津街道を通して塩津に至り、ここから船に積まれて湖上を行き、大津を経で都へと運ばれました。

塩津は、『万葉集』の「塩津山うち越え行けば我が乗れる馬そ爪づく家恋ふらしも」（巻3-365 笠朝臣金村）、「高島の阿渡の水門を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ」（巻9-1934）、「あぢかまの塩津を指して漕ぐ船の名は告りてしを逢わざらめやも」（巻11-2747）などのほか、『続日本紀』天平宝字8年（764年）9月18日条にある藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱に関する記載にその名を見ることができ、奈良時代にはすでに港として機能していたと考えられています。

また、平安時代の『延喜式』巻26主税寮上の「諸国運漕雑物功賃」には、北陸6国（越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡）の物資を敦賀で陸揚げして塩津に運ぶ駄賃（運送料）と、塩津から大津への船賃が定められ、治暦元年（1065年）9月の太政官符写（壬生家文書）には、京への調物に塩津で通行料を取ることを禁じる記載があるなど、都と地方を結ぶ要衝の港として公的な関与が及んでいたことがうかがえます。

このほか、平安時代の長徳2年（996年）9月に紫式部が詠んだ「知りならむ往来にならず塩津山世に経る道はからきものぞと」（『紫式部集』）からは、紫式部が父藤原為時と越前へ向かう際、塩津を経ていたことを知ることができ、『源平盛衰記』巻28には寿永2年（1183年）に木曾義仲追討の平家軍が塩津宿を通るなど、塩津港については歴史的な記録が多く残されています。

しかしながら、その一方で、古代から中世にかけての塩津港の明確な位置は明らかではありません。

今回の調査で見つかった盛土造成を伴う護岸施設は、平安時代後期に大規模な土木工事によって人工的な琵琶湖岸が造り出されたことを示すものであり、その位置から塩津港の施設の一角である可能性が考えられ、古代から中世の港の構造の一端を知る手がかりとなるものです。

また、琵琶湖岸を埋め立てて造成した護岸施設の構築技術は、これまで類例のない工法であり、当時の土木技術の水準を示す新たな事例といえます。



塩津港遺跡周辺図